

研究主題

第 11 回 東京都公立幼稚園 5 歳児の運動能力に関する調査研究

目 次

第 1 調査研究の概要

1 調査研究の経緯 . . . . . 56

2 調査研究の目的 . . . . . 56

3 調査研究の内容及び方法 . . . . . 56  
対象園、対象幼児、運動能力調査期間、運動能力調査等の内容及び方法

第 2 調査結果

1 平成22年度東京都公立幼稚園 5 歳児の運動能力調査結果一覧 . . . . . 57

2 運動能力調査結果における有意差検定の結果 . . . . . 57

第 3 調査結果の分析

1 種目別調査の結果と分析 . . . . . 58  
25m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ、体支持持続時間、両足連続跳び越し、  
身長及び体重

2 補助調査の結果と分析 . . . . . 68  
領域「健康」関わる指導の重点と指導・援助等における問題点  
幼児が楽しんで体を動かしている遊び  
日常生活に必要な動作や身のこなし  
小学校との連携事例  
幼児の行っている「動き」の比較

第 4 調査研究のまとめと今後の課題

1 調査研究のまとめ . . . . . 71

2 幼児が楽しみながら体を動かす遊びの充実に向けた指導・環境の工夫 . . . . . 72

3 今後の課題 . . . . . 72

○ 種目別調査結果の推移 . . . . . 73

○ 参考資料 . . . . . 76

＜研究の成果と活用＞

○ 東京都公立幼稚園 5 歳児の運動能力の傾向を示したこと

- 1 東京都公立幼稚園に在籍する 5 歳児約 2,200 人を対象とした運動能力調査を実施し、過去の調査結果と比較分析することで、幼児の運動能力の傾向を明らかにした。
- 2 幼児が楽しんで体を動かしている遊びの中に含まれる「動き」を 30 の要素に分類し、調査・分析した。
- 3 調査実施園 63 園に運動能力調査と併せて補助調査を実施し、幼児が楽しんで体を動かしている遊びや健康・体力づくりに関わる指導・援助等の状況や様々な動きを取り入れるための工夫を示した。

各幼稚園において運動能力調査と補助調査の結果を活用することで、幼児が楽しんで体を動かすことができる遊びや健康・体力づくりに関わる指導・援助等の工夫・改善につなげることができるとともに、幼稚園教育の充実を図るための研究・研修に役立てることができる。

## 第 1 調査研究の概要

### 1 調査研究の経緯

昭和 50 年代前半、都市化の影響から運動能力の発達が十分でなかったり、遊びに意欲的に取り組めなかったりする幼児の増加が問題視されるようになった。東京都教育委員会では幼稚園教育を推進する上で、幼児の運動能力の実態を捉えることが重要であると考え、昭和 55 年度より 3 年ごとに東京都公立幼稚園に在園する 5 歳児を対象に運動能力調査を実施してきた。また、平成 13 年度からは小学校教育との接続や連携の観点も含めて調査を行っている。

近年、幼児の育ちについては、基本的な生活習慣の欠如、自制心や耐性の不足、食生活の乱れ、運動能力の低下、小学校生活にうまく適応できない等の課題が指摘されており、国は子供を取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の充実に向けた総合的な施策を進めている。

### 2 調査研究の目的

本調査研究は、幼稚園教育の充実に資する資料の提供を行うことが目的であり、過去 10 回の調査結果と比較して幼児の運動能力の傾向を明らかにするとともに、調査実施園に対して運動能力に関する補助調査を実施した。補助調査では、幼児が楽しんで体を動かしている遊びや健康・体力づくりに関わる指導・援助の工夫等について調査した。

### 3 調査研究の内容及び方法

#### (1) 対象園

過去の調査で、継続的に調査を実施している園及び、これまで調査を行っていない区市から、新規に各 2 園程度。総数 63 園。

#### (2) 対象幼児〔平成 22 年 5 月 1 日現在 平成 22 年度学校基本調査速報より〕

都内全公立幼稚園等のうち調査協力園 63 園に在籍する 5 歳児 2,179 人  
(都内全公立幼稚園等 197 園に在籍する 5 歳児 6,125 人の 35.6%)

#### (3) 運動能力調査期間

平成 22 年 10 月から 11 月までの 2 か月の間の連続する 2 週間で実施した。

#### (4) 運動能力調査等の内容及び方法

##### ア 運動能力調査

##### (ア) 25m 走(主として敏捷性、瞬発力)

30m の直走路を走り、スタートから 25m の地点を通過したときの時間を測定する。

##### (イ) 立ち幅跳び(主として瞬発力)

両足同時に踏み切って跳び、踏み切り線と着地した地点との最短距離を測定する。

##### (ウ) ソフトボール投げ(主として瞬発力、調整力)

助走を行わずにボールを投げ、投球するラインと落下地点の距離を測定する。

##### (エ) 体支持持続時間(主として筋力、持久力)

2 つの巧技台の間に立ち、両腕で体を浮かし、体を支えられる時間を測定する。

##### (オ) 両足連続跳び越し(主として調整力、敏捷性)

4 m 50 cm の間に置かれた 10 個の積み木を両足で同時に跳ぶ時間を測定する。

※測定方法の詳細は、78 ページの参考資料に掲載。

## イ 運動能力に関する補助調査

幼児が楽しんで体を動かしている遊びや指導・援助の工夫等に関する補助調査を実施した。

## 第2 調査結果

## 1 平成22年度東京都公立幼稚園5歳児の運動能力調査結果一覧

5種目について、調査をした結果は以下のとおりである。

表1

年齢	性別	種目 人数	25m走(秒)		立ち幅跳び(cm)		ソフトボール投げ(m)		体支持持続時間(秒)		両足連続跳び越し(秒)	
			平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
年齢区分A	男児	437	6.5	1.9	101.5	16.9	5.4	2.4	40.8	26.6	5.5	1.7
	女児	431	6.6	0.6	93.9	17.0	3.9	1.4	42.0	30.2	5.6	1.3
	合計	868	6.5	1.4	97.8	17.4	4.6	2.1	41.4	28.5	5.6	1.5
年齢区分B	男児	690	6.2	0.8	109.2	18.9	6.6	2.7	52.7	37.3	5.3	1.2
	女児	621	6.4	0.6	100.1	16.7	4.5	1.6	52.5	37.9	5.3	1.3
	合計	1311	6.3	0.7	104.9	18.5	5.6	2.5	52.6	37.6	5.3	1.3
全体	男児	1127	6.3	1.4	106.3	18.6	6.1	2.7	48.1	34.1	5.4	1.4
	女児	1052	6.5	0.6	97.6	17.1	4.3	1.5	48.2	35.3	5.4	1.3
	合計	2179	6.4	1.1	102.1	18.4	5.2	2.4	48.1	34.7	5.4	1.4

※年齢区分A…～5歳11か月

年齢区分B…6歳0か月～

## 《標準偏差》

資料の各値とその平均値との隔たりを表す量を偏差といい、偏差の平方の平均を分散という。さらに、分散の平方根を標準偏差という。標準偏差は平均の周りにおける資料の散らばりの度合いを数量的に表す量である。

## 2 運動能力調査結果における有意差検定の結果

5種目について、男女間及び年齢区分間の有意差検定を行った結果は以下のとおりである。

表2

比較した項目	種目	25m走	立ち幅跳び	ソフトボール投げ	体支持持続時間	両足連続跳び越し
男児・女児間		○	○	○	×	×
年齢区分Aの男女間		×	○	○	×	×
年齢区分Bの男女間		○	○	○	×	×
男児の年齢区分A B間		○	○	○	○	○
女児の年齢区分A B間		○	○	○	○	○

(有意水準5%で ○有意差あり ×有意差無し)

有意差検定の結果、「立ち幅跳び」と「ソフトボール投げ」では性差・年齢差ともに有意差が認められたが、「体支持持続時間」「両足連続跳び越し」では、性差については有意差が認められなかった。また、「25m走」では、年齢区分Aの男女間のみ、有意差が認められなかった。

**《有意差検定》**  
 この調査研究では、サンプル数、平均値、平均値の標準偏差から有意差検定を行っている。  
 有意差検定の結果は、比較をした数値間に偶然とは言えない差があるかどうかを示している。  
 「有意水準 5%で有意差あり」とは、95%の確率で偶然とは言えない差があるということである。

**第 3 調査結果の分析**

**1 種目別調査の結果と分析**

**(1) 25m 走**

**<調査結果の概要>**

年齢区分 A では平均値が男児は 6.5 秒、女児は 6.6 秒である。年齢区分 B では平均値が男児は 6.2 秒、女児が 6.4 秒である。全体の平均では男児が 6.3 秒、女児が 6.5 秒である（表 3）。



表 3

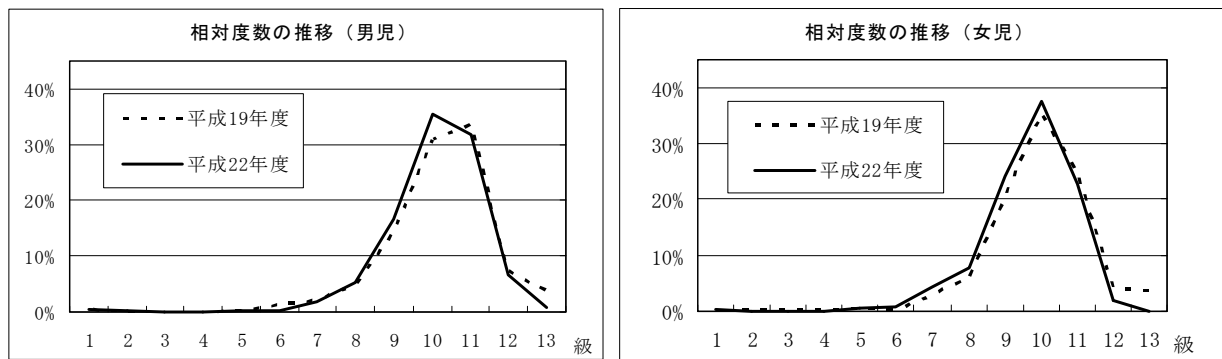
年度	性別	年齢区分	年齢区分 A (~5歳11ヶ月)					年齢区分 B (6歳0ヶ月~)					全 体					
			サンプル数	平均(秒)	標準偏差	変動係数	最高値(秒)	最低値(秒)	サンプル数	平均(秒)	標準偏差	変動係数	最高値(秒)	最低値(秒)	サンプル数	平均(秒)	標準偏差	変動係数
平成22年度	男児	A	403	6.5	1.9	29.8	5.0	43.0	651	6.2	0.8	12.9	5.0	16.0	1054	6.3	1.4	21.6
	女児	A	413	6.6	0.6	9.3	5.4	10.8	588	6.4	0.6	9.4	5.0	11.7	1001	6.5	0.6	9.4

**《変動係数》**  
 変動係数は平均値に対する標準偏差の割合を表すもので、相対的な散らばりを表す指標である。標準偏差は測定単位の影響を受けるので単位の異なる資料の比較ができないが、変動係数は単位が異なる資料の散らばりの度合いを相互に比較できる。この値が大きいほど平均の周りにおける資料の散らばりの度合いが大きい。

**<度数の分布>**

男児、女児とも過去の度数の分布とほぼ同じ形状を示している。また、男児は 11 級と 13 級の割合が減り、10 級の割合が増えている。女児は 13 級の割合が減り、10 級の割合が増えている（図 1）。

図 1



1級 10.6～	2級 10.1～10.5 (代表値 10.3)	3級 9.6～ 10.0 (代表値 9.8)
4級 9.1～ 9.5 (代表値 9.3)	5級 8.6～ 9.0 (代表値 8.8)	6級 8.1～ 8.5 (代表値 8.3)
7級 7.6～ 8.0 (代表値 7.8)	8級 7.1～ 7.5 (代表値 7.3)	9級 6.6～ 7.0 (代表値 6.8)
10級 6.1～ 6.5 (代表値 6.3)	11級 5.6～ 6.0 (代表値 5.8)	12級 5.1～ 5.5 (代表値 5.3)
13級 ~ 5.0		(単位：秒)

＜過去10回の調査との比較＞

平成10年度に、男児の平均値は6.4秒に、女児の平均値は6.5秒に下がったが、平成16年度に男児・女児ともに0.1秒上がり、男児6.3秒、女児6.4秒となった。今回の調査では、男児は平成16年度から3回連続で6.3秒となり、女児は前回調査から0.1秒遅くなり、6.5秒となった(図2)。

昭和55年度の結果を100とした指数変化(図3)では、昭和55年度から平成7年度まで男児・女児ともに変化はなかったが、平成10年度から男児・女児ともに低下した。平成16年度の調査で女児の指数は昭和55年度の値100に戻し、男児の指数も98.4に上昇した。今回の調査では、男子が98.4、女児が98.5である。男児・女児共に昭和55年度の第1回調査以降ほぼ横ばいの状態で、大きな変化は見られない。

図2

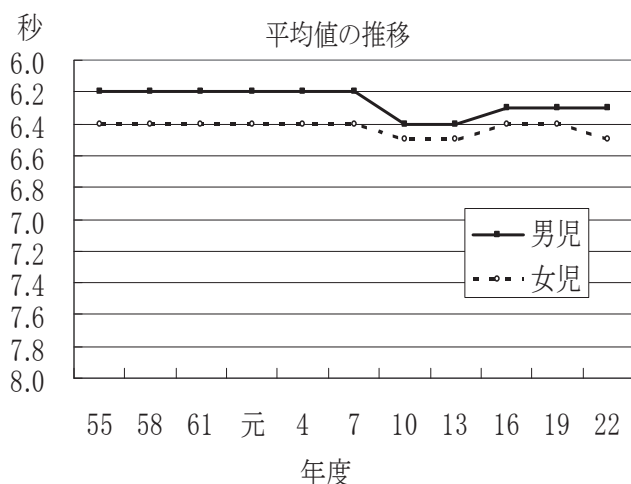
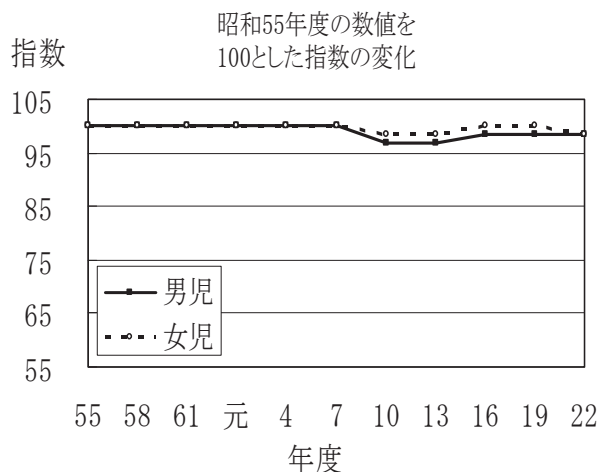


図3

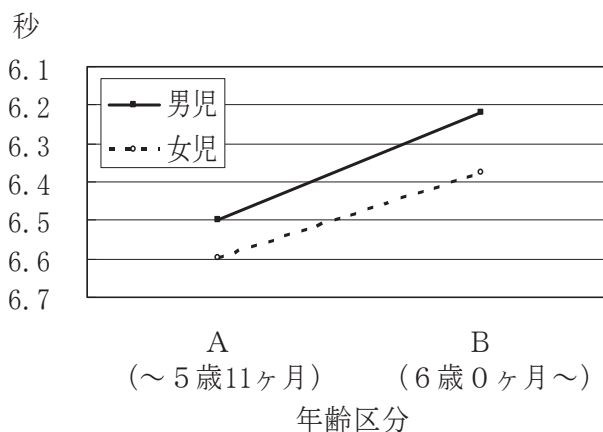


＜年齢区分間の運動能力の比較＞

図4

年齢区分AとBの差は、男児は約0.3秒、女児は約0.2秒になっている(図4)。

前回調査では、男児の年齢区分間の差が大きく、女児の差は少ない傾向にあったが、今回の調査では男児・女児とも年齢区分による差が大きくなった。また、女児B区分の記録は前回調査とほぼ同じ値であり、女児A区分の数値は、前回調査より約0.1秒遅くなった。



(2) 立ち幅跳び

<調査結果の概要>

年齢区分 A では、平均値が男児は 101.5cm、女児は 93.9cm である。また、年齢区分 B では、平均値が男児は 109.2cm、女児は 100.1cm である。全体の平均は、男児が 106.3cm、女児が 97.6cm である (表 4)。



表 4

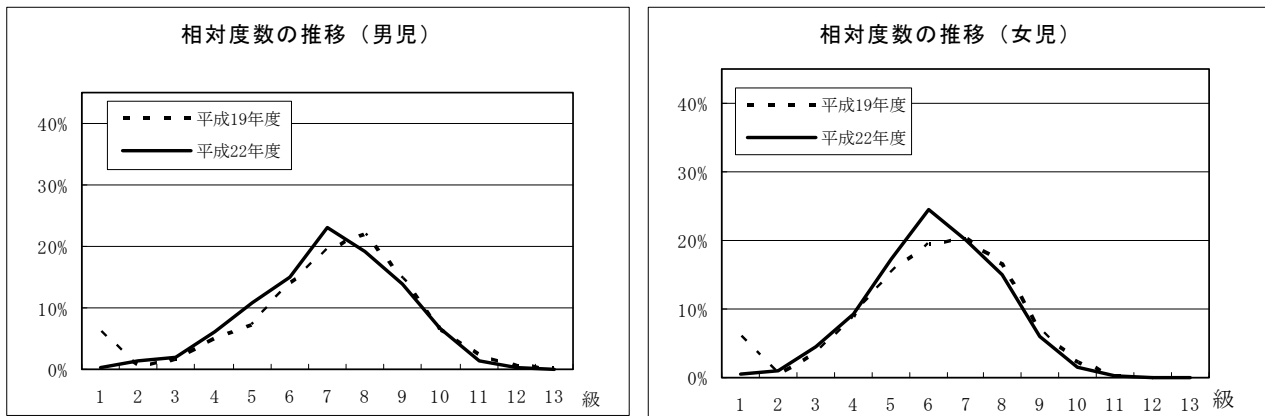
年度	性別	年齢区分 A (~5歳11ヶ月)						年齢区分 B (6歳0ヶ月~)						全 体			
		サンプル数	平均 (cm)	標準偏差	変動係数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	サンプル数	平均 (cm)	標準偏差	変動係数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	サンプル数	平均 (cm)	標準偏差	変動係数
平成 22 年度	男 児	413	101.5	16.9	16.6	155.0	52.0	660	109.2	18.9	17.3	160.0	49.0	1073	106.3	18.6	17.5
	女 児	408	93.9	17.0	18.1	139.0	20.0	591	100.1	16.7	16.7	150.0	36.0	999	97.6	17.1	17.5

<度数の分布>

男児・女児とも過去の度数の分布とほぼ同じ形状を示している (図 5)。

前回調査と比較すると、男児・女児ともに 1 級は減少している。また、男児では 7 級、女児では 6 級の割合が増加している。

図 5



1 級	0 ~ 50 (代表値 25)	2 級	51 ~ 60 (代表値 55)	3 級	61 ~ 70 (代表値 65)
4 級	71 ~ 80 (代表値 75)	5 級	81 ~ 90 (代表値 85)	6 級	91 ~ 100 (代表値 95)
7 級	101 ~ 110 (代表値 105)	8 級	111 ~ 120 (代表値 115)	9 級	121 ~ 130 (代表値 125)
10 級	131 ~ 140 (代表値 135)	11 級	141 ~ 150 (代表値 145)	12 級	151 ~ 160 (代表値 155)
13 級	161 ~				

(単位 : cm)

<過去 10 回の調査との比較>

平均値は、男児が平成元年度に最も高い値を示したが、その後は低下の傾向にある。女児は平成 13 年度の調査では一度上昇したが、今回の調査では、低下傾向になっている (図 6)。

昭和 55 年度の結果を 100 とした指数変化 (図 7) では、男児は 94.7、女児は 95.5 となっており、低下傾向ではあるものの、その変化は緩やかであることが分かる。

図 6

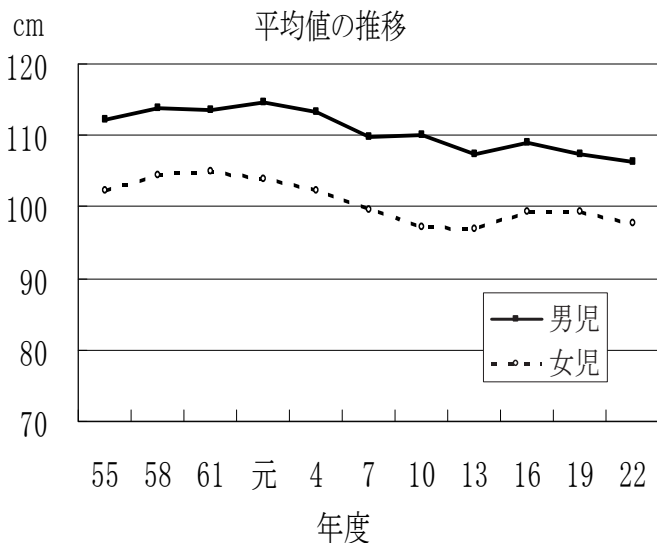
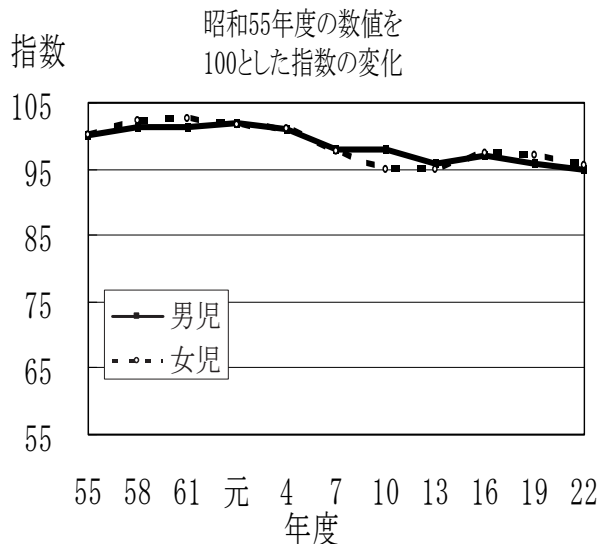


図 7

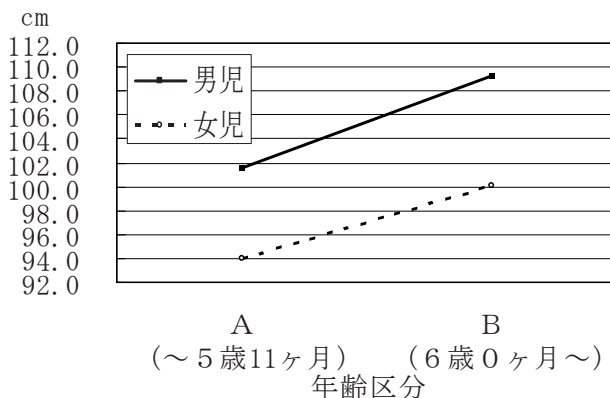


<年齢区分間の運動能力の比較>

図 8

年齢区分A Bともに性差が見られる(図8)。

前回調査と比較すると、男児はA、B区分ともに若干の低下が見られる。女児はB区分の幼児はほとんど変化が見られないが、A区分は4 cm程度低下している。



(3) ソフトボール投げ

<調査結果の概要>

年齢区分Aでは、平均値が男児は 5.4m、女児は 3.9m である。年齢区分Bでは、平均値が男児は 6.6m、女児は 4.5m である。全体の平均では、男児が 6.1m、女児が 4.3m である(表5)。



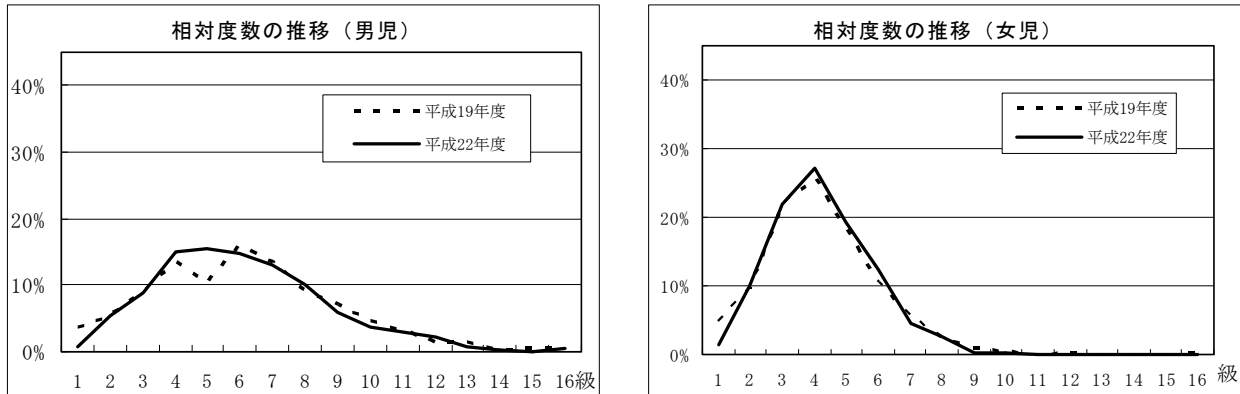
表 5

年度	年齢 項目 性別	年齢区分A(～5歳11ヶ月)						年齢区分B(6歳0ヶ月～)						全 体			
		サンプル 数	平均 (m)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (m)	最低値 (m)	サンプル 数	平均 (m)	標準 偏差	変動 係数	最高値 (m)	最低値 (m)	サンプル 数	平均 (m)	標準 偏差	変動 係数
平成 22 年度	男 児	404	5.4	2.4	43.7	13.0	1.0	655	6.6	2.7	41.8	20.0	1.0	1059	6.1	2.7	43.6
	女 児	414	3.9	1.4	36.8	10.0	0.0	583	4.5	1.6	34.7	10.0	1.0	997	4.3	1.5	36.0

<度数の分布>

男児の度数分布は 1 級から 13 級までの広い範囲に分布しているが、女児は 4 級を中心に集中している。男児 5 級の度数が大きく変化しているが、その他の部分では、前回調査と大きな変化は見られない。この種目は、変動係数を見ても個人差が大きい種目と言える（図 9）。

図 9



1 級	0 ~ 1.0 (代表値 0.5)	2 級	1.1 ~ 2.0 (代表値 1.5)	3 級	2.1 ~ 3.0 (代表値 2.5)
4 級	3.1 ~ 4.0 (代表値 3.5)	5 級	4.1 ~ 5.0 (代表値 4.5)	6 級	5.1 ~ 6.0 (代表値 5.5)
7 級	6.1 ~ 7.0 (代表値 6.5)	8 級	7.1 ~ 8.0 (代表値 7.5)	9 級	8.1 ~ 9.0 (代表値 8.5)
10 級	9.1 ~ 10.0 (代表値 9.5)	11 級	10.1 ~ 11.0 (代表値 10.5)	12 級	11.1 ~ 12.0 (代表値 11.5)
13 級	12.1 ~ 13.0 (代表値 12.5)	14 級	13.1 ~ 14.0 (代表値 13.5)	15 級	14.1 ~ 15.0 (代表値 14.5)
16 級	15.1 ~				

(単位 : m)

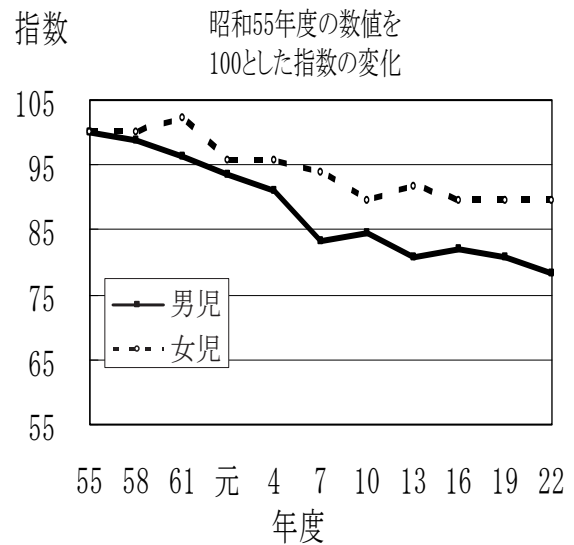
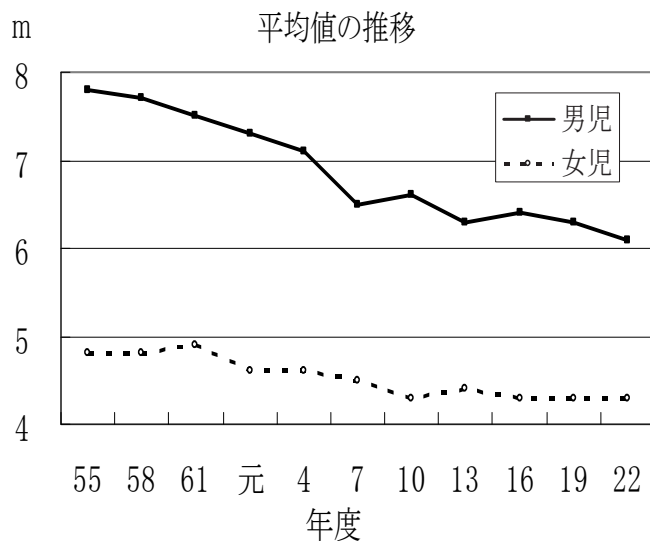
<過去 10 回の調査との比較>

男児は平成 7 年度以降、多少の上下を繰り返しつつ下降している。今回調査でも緩やかに下降しており、前回から 0.2m 下回った。女児は平成 16 年度調査から変わらず、同じ値を維持している（図 10）。

指数変化を見ると、この種目の下降率は、男児の方が大きいことが分かる（図 11）。

図 10

図 11

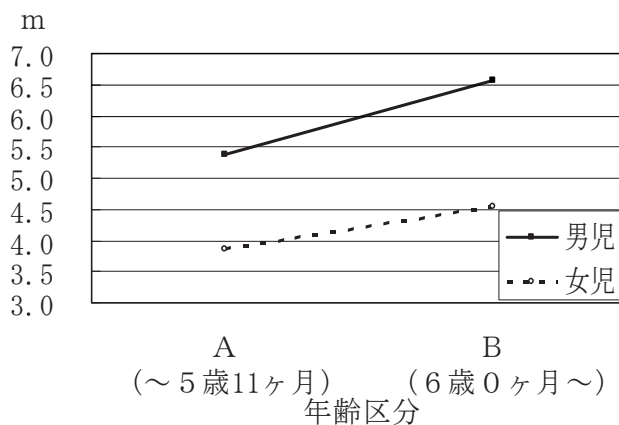




＜年齢区分間の運動能力の比較＞

図 12

年齢区分AとBの値の差は、男児は1.2m、女児は0.7mで、前回調査時とほぼ同様の状況である。また、性差も大きく、この傾向も前回調査時と同じである（図12）。



(4) 体支持持続時間

＜調査結果の概要＞

年齢区分Aでは、平均値が男児は40.8秒、女児は42.0秒である。また、年齢区分Bでは平均値が男児は52.7秒、女児は52.5秒である。全体の平均では、男児が48.1秒、女児が48.2秒である（表6）。



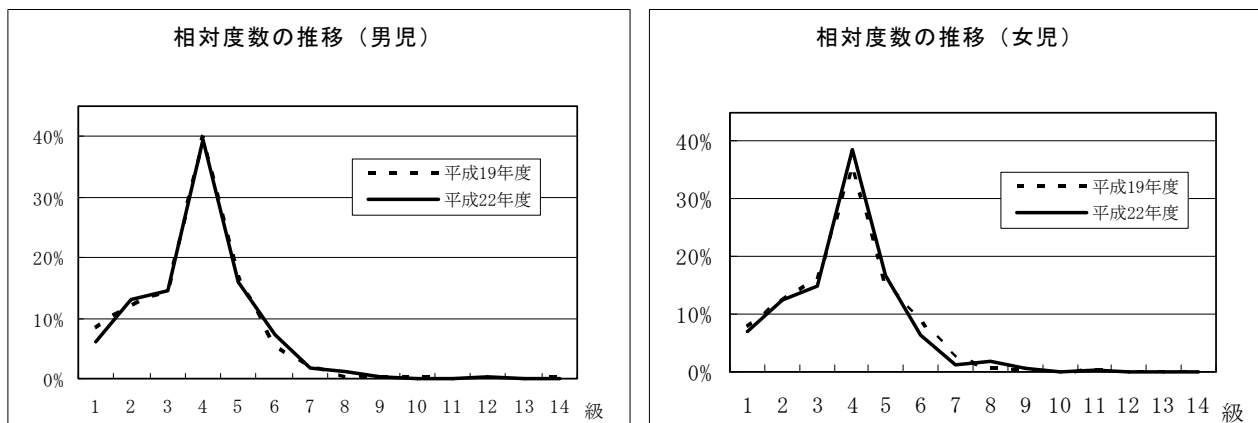
表 6

年齢	項目 性別	年齢区分A(～5歳11ヶ月)						年齢区分B(6歳0ヶ月～)						全 体			
		サンプル 数	平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	サンプル 数	平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	サンプル 数	平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数
平成 22 年度	男 児	414	40.8	26.6	65.3	171.0	2.0	667	52.7	37.3	70.7	288.0	1.0	1081	48.1	34.1	70.9
	女 児	417	42.0	30.2	71.9	277.0	1.0	597	52.5	37.9	72.3	250.0	1.0	1014	48.2	35.3	73.3

＜度数の分布＞

男児・女児とも過去の度数分布と同じように4級に値が集中しており、性差も少ない。変動係数が大きく、この種目は個人差が大きいと言える（図13）。

図 13



1級	0～10 (代表値 5)	2級	11～20 (代表値 15)	3級	21～30 (代表値 25)
4級	31～60 (代表値 45)	5級	61～90 (代表値 75)	6級	91～120 (代表値 105)
7級	121～150 (代表値 135)	8級	151～180 (代表値 165)	9級	181～210 (代表値 195)
10級	211～240 (代表値 225)	11級	241～270 (代表値 255)	12級	271～300 (代表値 285)
13級	301～330 (代表値 315)	14級	331～		

(単位：秒)

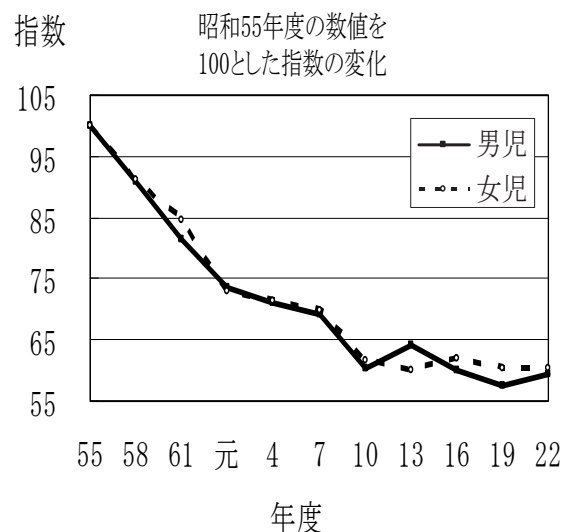
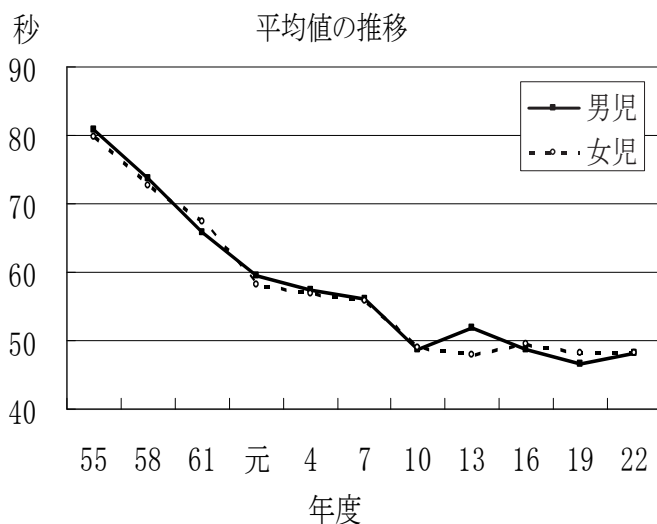
<過去10回の調査との比較>

平均値は、昭和55年度から平成10年度にかけて男児が32.2秒、女児が30.7秒低下した。男児は平成19年度に本調査における最低値となったが、今回調査では1.5秒上昇して平成16年度の値に近づいた。また、女児は0.1秒向上し、平成10年度よりほぼ横ばいである(図14)。

指数変化では男児は回復傾向を示した。この種目は性差が少ないため、指数変化を表したグラフもほぼ同じ形状となっている(図15)。

図14

図15

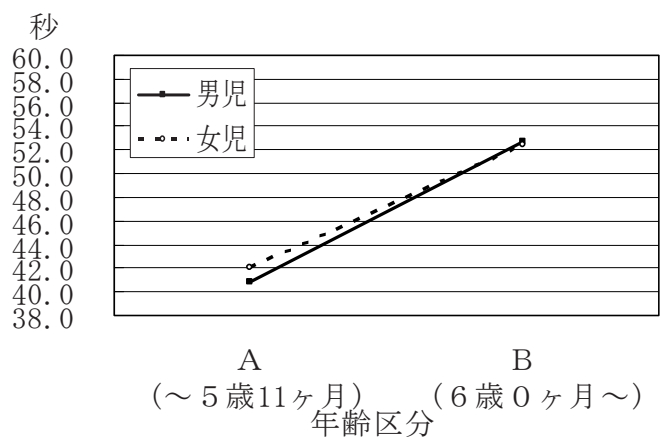


<年齢区分間の運動能力の比較>

図16

年齢区分AとBでは、男児・女児とも10秒以上の違いがある(図16)。

この種目では、前回調査時もA区分は女児の数値が高く、B区分では男児の数値が高くなっていた。今回調査では、年齢区分Aの性差は小さいものの、A区分は女児の数値が高くなっている。



(5) 両足連続跳び越し

<調査結果の概要>

年齢区分 A では、平均値が男児は 5.5 秒、女児は 5.6 秒である。また、年齢区分 B では平均値が男児は 5.3 秒、女児は 5.3 秒である。全体の平均では、男児が 5.4 秒、女児が 5.4 秒である(表 7)。



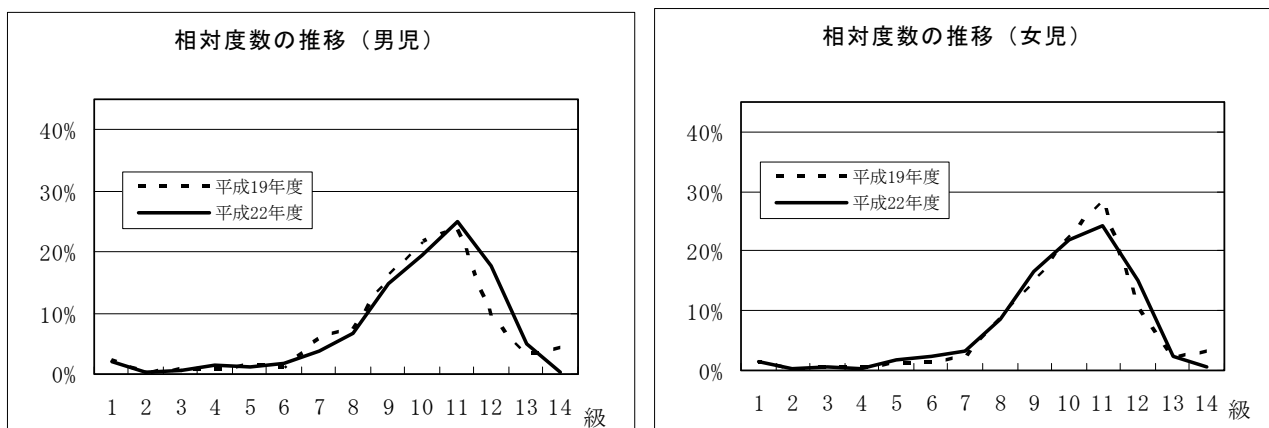
表 7

年度	年齢 項目 性別	年齢区分 A (~5 歳 11 ヶ月)						年齢区分 B (6 歳 0 ヶ月 ~)						全 体			
		サンプル数	平均(秒)	標準偏差	変動係数	最高値(秒)	最低値(秒)	サンプル数	平均(秒)	標準偏差	変動係数	最高値(秒)	最低値(秒)	サンプル数	平均(秒)	標準偏差	変動係数
		平成 22 年度	男 児	399	5.5	1.7	30.3	3.2	19.2	654	5.3	1.2	23.0	3.0	14.5	1053	5.4
	女 児	404	5.6	1.3	22.5	3.7	17.7	587	5.3	1.3	24.8	2.9	23.2	991	5.4	1.3	24.1

<度数の分布>

男児・女児とも過去の度数分布と大きな変化は見られないが、男児は 12 級が増加し、14 級は減少している。また、女児は 11 級と 14 級の割合が減少している(図 17)。

図 17



1 級	9.6 ~	2 級	9.1 ~ 9.5 (代表値 9.3)	3 級	8.6 ~ 9.0 (代表値 8.8)
4 級	8.1 ~ 8.5 (代表値 8.3)	5 級	7.6 ~ 8.0 (代表値 7.8)	6 級	7.1 ~ 7.5 (代表値 7.3)
7 級	6.6 ~ 7.0 (代表値 6.8)	8 級	6.1 ~ 6.5 (代表値 6.3)	9 級	5.6 ~ 6.0 (代表値 5.8)
10 級	5.1 ~ 5.5 (代表値 5.3)	11 級	4.6 ~ 5.0 (代表値 4.8)	12 級	4.1 ~ 4.5 (代表値 4.3)
13 級	3.6 ~ 4.0 (代表値 3.8)	14 級	~ 3.5		(単位: 秒)

<過去 10 回の調査との比較>

平均値は、男児は平成 16 年度の調査で平成 13 年度の値 5.4 秒から 5.7 秒となっており、前回調査と今回調査では、2 回連続で速くなっている。女児の値も速くなる傾向にあり、調査を開始した昭和 55 年度との差は 0.1 秒である(図 18)。

また、昭和 55 年度の結果を 100 とした指数変化からは、ほぼ横ばいで推移している状況が分かる。これまでの調査でも明確な傾向が出ていない種目でもあるため、運動能力が低下しているか向上しているかは、今後の調査結果を確認する必要がある(図 19)。

図 18

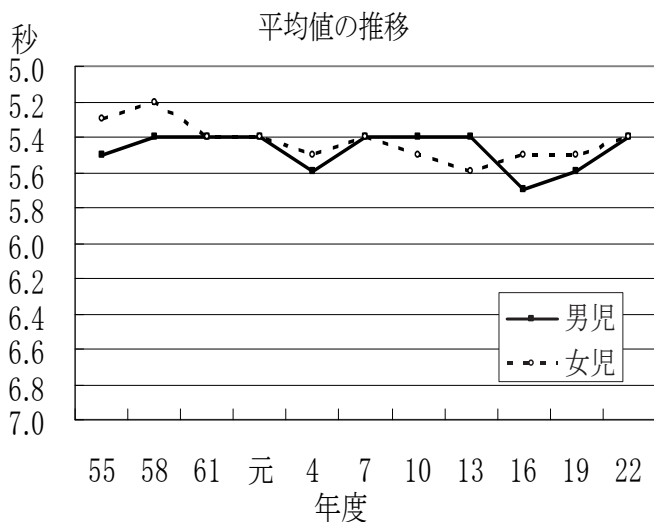
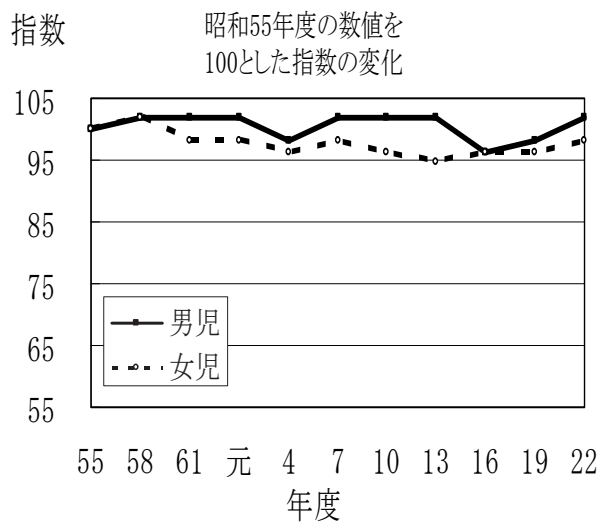


図 19

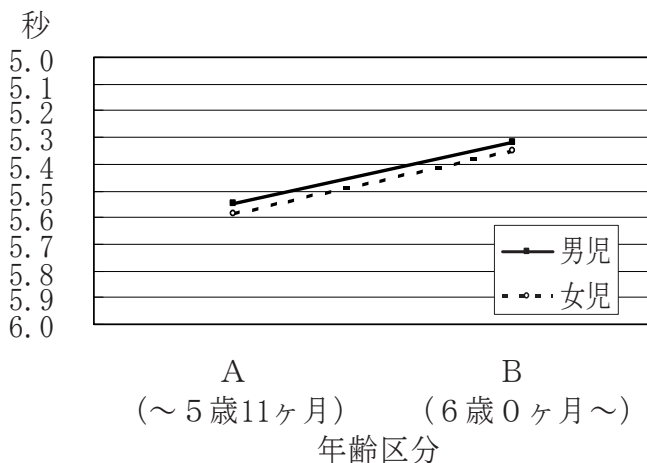


<年齢区分間の運動能力の比較>

図 20

年齢区分AとBの差は、男児は0.1秒、女児は0.2秒となっている(図20)。

また、年齢区分による差は少なく、性別による違いもほとんどない種目である。



(6) 身長及び体重

ア 身長

(7) 平成22年度 調査結果

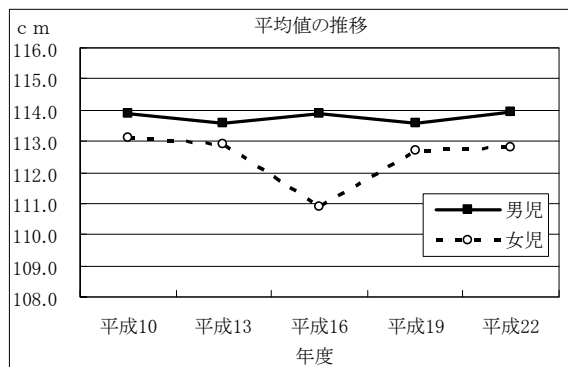
<調査結果の概要>

年齢区分Aでは、平均値が男児は112.0cm、女児は110.7cmである。また、年齢区分Bでは、平均値が男児は115.2cm、女児は114.3cmである。全体の平均は、男児が114.0cm、女児が112.8cmである(表8)。

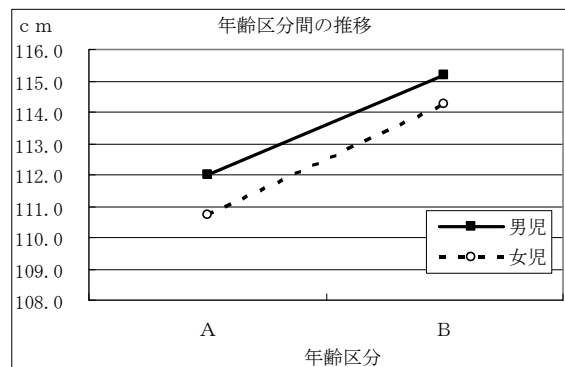
表 8

年度	性別	年齢区分A (~5歳11ヶ月)						年齢区分B (6歳0ヶ月~)						全 体			
		サンプル数	平均 (cm)	標準偏差	変動係数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	サンプル数	平均 (cm)	標準偏差	変動係数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	サンプル数	平均 (cm)	標準偏差	変動係数
平成22年度	男児	427	112.0	4.7	4.2	125.9	91.0	677	115.2	4.7	4.1	131.1	88.1	1104	114.0	4.9	4.3
	女児	423	110.7	4.4	3.9	123.6	93.5	610	114.3	4.7	4.1	133.8	101.3	1033	112.8	4.9	4.4

(イ) 平均値の推移 (過去 5 回) 図 21



(ウ) 年齢区分間の比較 図 22



身長平均値の推移では、平成 16 年度の調査を除き、男児は 114cm 程度、女児は 113cm 程度と、大きな変化はない。今回の調査でも、男児は 114.1cm であり、女児は 112.9cm と過去と同様に平均的な値であった (図 21)。年齢区分間の比較では、男児が 3.2cm、女児が 3.6cm 値が大きくなっており、これも前回調査とほぼ同じである (図 22)。

ア 体重

(7) 平成 22 年度 調査結果

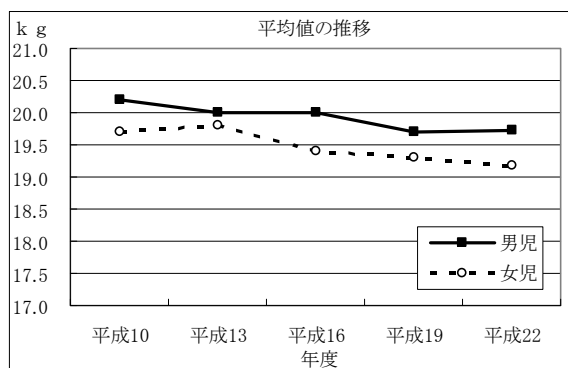
< 調査結果の概要 >

年齢区分 A では、平均値が男児は 19.0kg、女児は 18.3kg である。また、年齢区分 B では、平均値が男児は 20.2kg、女児は 19.8kg である。全体の平均は、男児が 19.7kg、女児が 19.2kg である (表 9)。

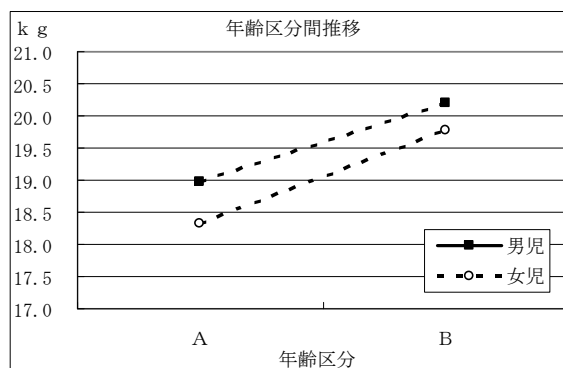
表 9

年度	性別	年齢区分 A (~5 歳 11 ヶ月)						年齢区分 B (6 歳 0 ヶ月 ~)						全 体			
		サンプル数	平均 (kg)	標準偏差	変動係数	最高値 (kg)	最低値 (kg)	サンプル数	平均 (kg)	標準偏差	変動係数	最高値 (kg)	最低値 (kg)	サンプル数	平均 (kg)	標準偏差	変動係数
平成 22 年度	男児	428	19.0	2.6	13.8	30.4	13.2	678	20.2	3.0	14.9	40.9	14.2	1106	19.7	2.9	14.9
	女児	424	18.3	2.5	13.6	32.1	10.3	610	19.8	3.0	15.1	40.1	12.5	1034	19.2	2.9	15.0

(イ) 平均値の推移 (過去 5 回) 図 23



(ウ) 年齢区分間の比較 図 24



体重平均値の推移は、平成 10 年度の調査と比較して男児・女児ともに低下する傾向が見られる。男児は、今回の調査で平均値が 19.7kg とほぼ横ばいの変化となったが、女児は、平成 13 年度以降、継続的に減少傾向にある (図 23)。年齢区分間の比較では、男児が 1.2kg、女児が 1.5kg となっているが、この数値も前回調査とほぼ同じ値である (図 24)。

## ウ カウプ指数

表 10

年度	年齢 項目 性別	年齢区分A(～5歳11ヶ月)						年齢区分B(6歳0ヶ月～)						全 体			
		サンプル 数	平 均	標 準 偏 差	変 動 係 数	最高値	最低値	サンプル 数	平 均	標 準 偏 差	変 動 係 数	最高値	最低値	サンプル 数	平 均	標 準 偏 差	変 動 係 数
平成 22 年度	男 児	427	15.1	1.4	9.4	21.7	12.7	677	15.2	1.6	10.4	26.5	11.2	1104	15.1	1.5	10.0
	女 児	423	14.9	1.4	9.2	24.3	11.6	610	15.1	1.6	10.4	25.4	11.8	1033	15.0	1.5	10.0

カウプ指数は、発育の状況を示す指数の一つであり、身長と体重のつりあいを数値で示したものである。前回調査時のカウプ指数は、男児で 15.2、女児で 15.1 とほぼ同じ値であり、今回の調査でも、男児、女児ともに発育状態が「普通」であることを示している。

## 《カウプ指数》

以下の式により算出される、肥満度を表す体格指数である。

$$\text{カウプ指数} = \{ \text{体重(g)} / \text{身長(cm)} \times \text{身長(cm)} \} \times 10$$

一般にボディマス指数(BMI)と呼ばれる指数と同じであるが、乳幼児に対して用いられ、年齢が3、4、5歳の場合は、カウプ指数が14.5から16.5であれば、発育状態を「普通」とする。

## 2 補助調査の結果と分析

運動能力調査と併せて、健康・体力づくりに関わる指導・援助の工夫や、5歳児が楽しんで体を動かしている遊びについて、各園での工夫や、遊びで見られる「動き」について調べるための補助調査アンケートを実施し、分析した。なお、質問に用いたアンケート用紙は79ページに記載した。

## (1) 領域「健康」に関わる指導の重点と指導・援助等における問題点

各園での領域「健康」に関わる取組としては、「十分に体を動かすこと」や「幼児が進んで運動できる環境を整える」ことが挙げられており、早寝早起きなどの「生活リズム」に関する取組みも見られる。体の健康以外に、心の健康に関しても重点的に取り組んでいるほか、「食べ物に対して感謝の気持ちをもつ」等、食に関する活動を重点としている幼稚園等もあった。

領域「健康」に関わる課題として、各園に調査を実施した結果は以下の通りとなった。

表 11

幼児が体を動かすことや運動の好き嫌いなど、個人差が大きくなっている。	27.0%
幼児の動きが以前と比べてぎこちなく感じる。また、転びやすくなっている。	19.8%
基本的な生活習慣や生活リズムなどが定着してない幼児が増えた。	17.1%
偏食など、食生活に問題のある幼児が増えた。	16.2%
新しい遊びに取組もうとしなかったり、すぐにあきらめてしまったりする幼児が増えた。	9.0%
遊ぶ場所が狭く、施設や設備が不足している。	7.2%
その他	3.6%

「遊ぶ場所が狭く、施設や設備が不足している。」については、園庭のみを使用する際には、十分な広さを確保できないことはあるものの、近隣の小学校と連携し、校庭を利用したり公園を活用したりなど、各園の工夫により対応しているため、「不足」と感じている園は少ないと考えられる。また、「新しい遊びに取組もうとしなかったり、すぐにあきらめてしまったりする幼児が増えた。」も9.0%と低い数値となっている。

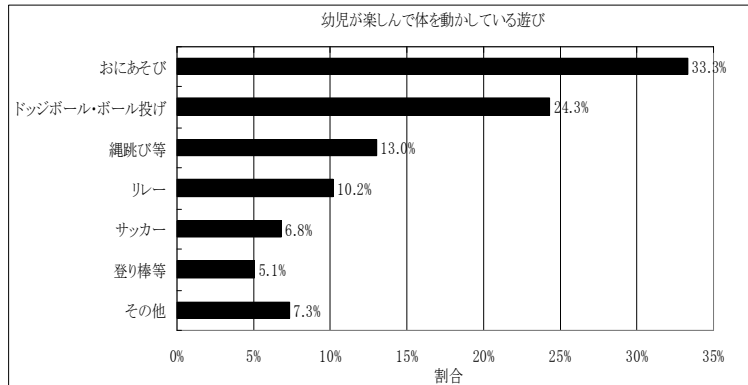
一方で、「幼児が体を動かすことや運動の好き嫌いなど、個人差が大きくなっている。」(27.0%)、「幼児の動きが以前と比べてぎこちなく感じる。また、転びやすくなっている。」(19.8%)等、幼児自身の運動能力の低下を心配する回答は高い数値となっている(表11)。

(2) 幼児が楽しんで体を動かしている遊び

図 25

平成19年度の前回調査時には「おにであそび」「かけっこ・リレー」「ボール」「なわ・フープ」の順で割合が高かった。

「おにであそび」については、今回調査でも割合が高く、次に「ドッジボール・ボール投げ」となっている(図25)。



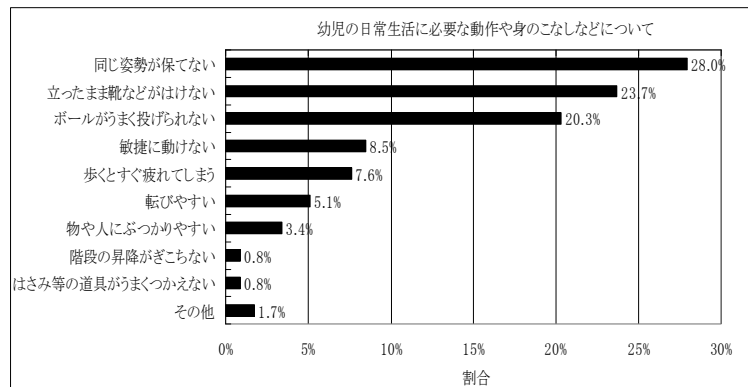
(3) 日常生活に必要な動作や身のこなし

図 26

前回調査時に用いたアンケートを参考に調査項目を作成し、調査実施園で教員が感じていることを2つ以内で回答してもらった(図26)。

「階段の昇降がぎこちない。」「はさみ等の道具がうまくつかえない。」等については、ほとんど回答はなく、「同じ姿勢が保てない。(28.0%)」

「立ったまま靴などがはけない。(23.7%)」など、バランス感覚や持久力に関する部分が必要となるなどの回答が多かった。

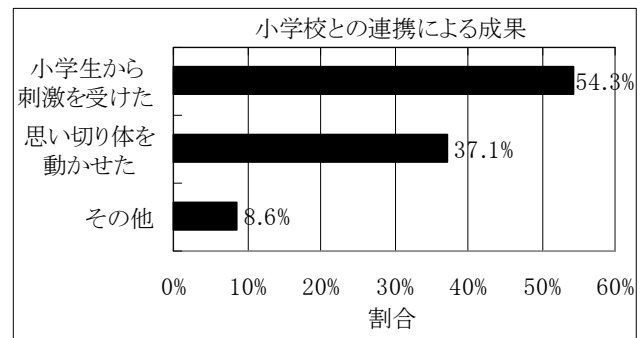
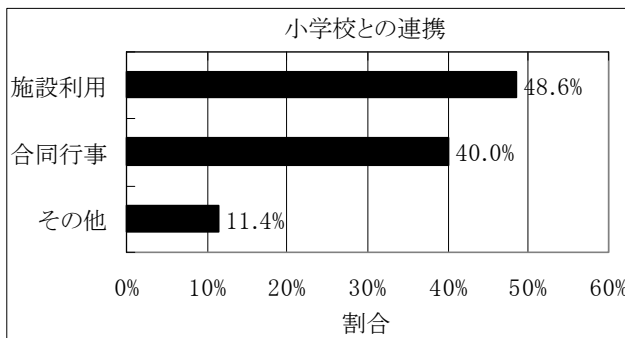


(4) 小学校との連携事例

幼児の健康・体力づくりに関する小学校との連携については、校庭や体育館、プール等の施設・設備を活用しているとの回答が多く、広い場所を利用し、幼児に伸び伸びと運動をさせている。また、小学生とともに活動することで、様々な動きに自然に挑戦するなど、良い刺激になっているとの回答もあった(図27、28)。

図 27

図 28



(5) 食習慣の見直しに関する取組

食習慣の見直しに関しては、「野菜を栽培し、収穫して食べる。」という取組みが52.7%の幼

幼稚園等で行われていた。また「栄養士による指導」や「小学校との交流給食」を行っているところもある（図 29）。

成果としては、「自分で収穫したものを食べてみよう」と挑戦し、食べられるようになった。」  
「食べ物に関する感謝の気持ちをもつようになった。」などの回答が見られた（図 30）。

図 29

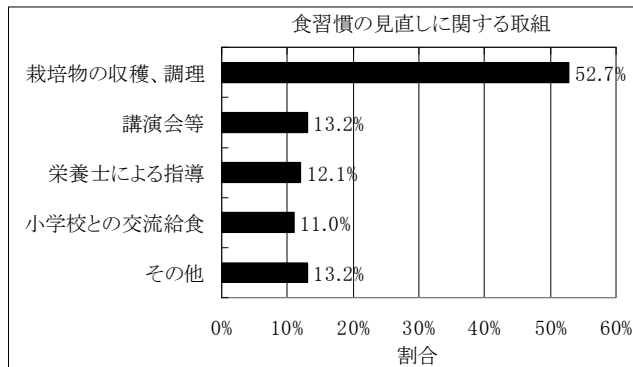
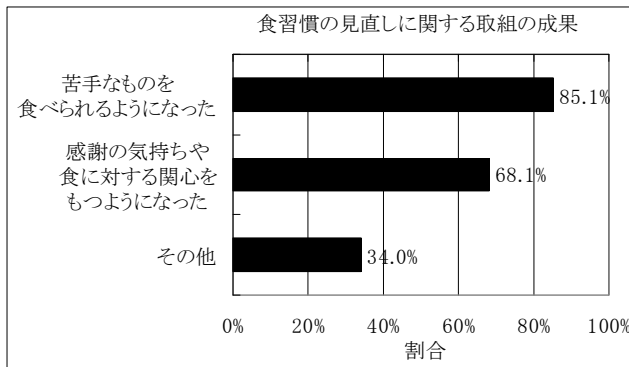


図 30



### (6) 幼児の行っている「動き」の比較

今回の調査では、幼児が楽しんで体を動かしている遊びについて 3 つ以内で回答してもらい、その遊びに含まれる「動き」の要素を、30 種類に分類して集計した。また、5 種目の運動能力調査を実施した結果、その全ての項目について平均より上位に位置する各園幼児 2 名について、好む遊びの種類と、その中に含まれる「動き」の要素を比較した。

#### 《「動き」について》

本調査における動きは、幼児が自ら選んだ遊びをしている様子を観察・調査した結果から、財団法人体育科学センターが提案した基本的動作及び、「平成 17 年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 I 幼少期に身につけておくべき基本運動（基礎的動き）に関する研究」、NHK「からだであそぼ」において使用された基本動作のそれぞれを参考として作成した。

- |              |               |          |            |
|--------------|---------------|----------|------------|
| 1. たつ・しゃがむ   | 2. おきる・ねる     | 3. まわる   | 4. ころがる    |
| 5. くむ・つまかさなる | 6. わたる        | 7. ぶらさがる | 8. のぼる     |
| 9. おりる       | 10. とびおりる     | 11. はう   | 12. あるく    |
| 13. はしる      | 14. とぶ・はねる    | 15. かわす  | 16. くぐる    |
| 17. もつ・はこぶ   | 18. おす        | 19. ひく   | 20. つかむ    |
| 21. なげる      | 22. うける・うけとめる | 23. わたす  | 24. ふる     |
| 25. まわす      | 26. つむ・つまあげる  | 27. ころがす | 28. ほる・けずる |
| 29. うつ・たたく   | 30. ける        |          |            |

※ 動きの要素については、「はしる」「なげる」等、よく見られることが予想されるものを抽出したほか、「およぐ」「もぐる」等、特定の季節に影響される動作を省くなど、本調査の調査委員会で検討し、決定した。

「おにあそび」では、「たかおに」「こおりおに」等、ルールや場の工夫により、含まれる動きの要素に違いはあるが、「はしる」「かわす」等が共通して含まれていた。

「ドッジボール・ボール投げ」では、当たっても痛くないボールを使用する等の遊具の工夫が見られ、動きの要素としては、「はしる」「かわす」「なげる」「うける・うけとめる」等が多く見られた。

また、運動能力が上位に位置する幼児の場合、「登り棒」「うんてい」「鉄棒」等の出現頻度が高くなっている（図 31）。



図 31

動きの要素の出現頻度から作成した集計結果を図 32 に示した。この結果を見ると、運動能力が上位に位置する幼児は「はしる」「とぶ」「かわす」といった要素は相対的に割合が小さくなっているが、「わたる」「ぶらさがる」「のぼる」「おりる」「とびおりる」「ける」等の要素が優位な数値を示している。

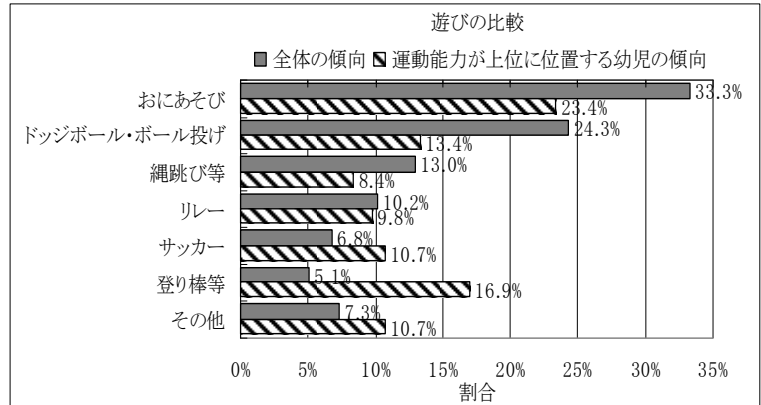
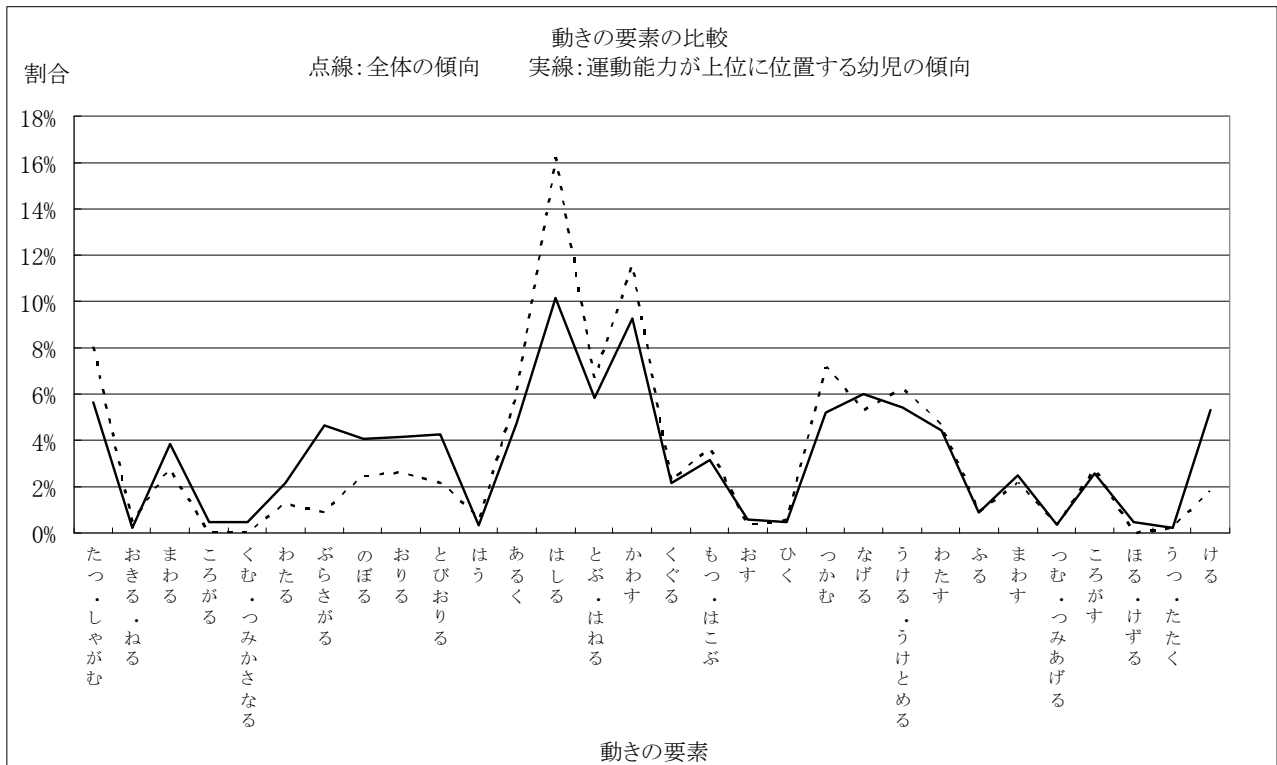


図 31, 32 からは、全体の傾向と比較して、

最大値と最小値の数値差が小さいことが読み取れるため、運動能力が上位に位置する幼児が、特定の遊びにかたよらず、様々な遊びに取り組み、様々な動きを体験していることが考えられる。

図 32



#### 第 4 調査研究のまとめと今後の課題

##### 1 調査研究のまとめ

幼児の運動能力を種目別に見ると、「25m 走」は昭和 55 年度の第 1 回調査からほぼ横ばいであり、大きな変化は見られない。「立ち幅跳び」は低下傾向ではあるものの、その変化は緩やかである。「ソフトボール投げ」については、男児は低下傾向となっているが、女児は横ばいが続いている。「体支持持続時間」は、男児は上昇傾向になっており、女児はここ数回の調査ではほぼ横ばいである。ただ、標準偏差及び変動係数を見ると、個人差の大きい種目であることが分かる。「両足連続跳び越し」は、年齢区分間の有意差検定では有意差がないとの結果が出ている。ほぼ横ばいで推移しているが、調査年度ごとの変化も大きいため、明確な傾向は不明である。

## 2 幼児が楽しみながら体を動かす遊びの充実に向けた指導・環境の工夫

幼稚園教育要領の領域「健康」には、内容を取扱う際の留意事項として「様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動すること」等が示され、いろいろな遊びの中で十分に体を動かすことが求められている。また、東京都教育委員会では、平成22年7月の「総合的な子供の基礎体力向上方策 第1次推進計画」において、子供の心と体をバランスよく成長・発達させていくよう見守り、育て、働きかけていくことが必要であり、体力向上に向けて今まで以上の取組が必要であると示している。

そのためには、幼児の経験の少ない動きを効果的に取り入れていく必要がある。今回の調査結果から、運動能力が上位に位置する幼児は様々な動きに取り組んでいると考えられる。そこで、様々な動きに挑戦するための一例として、「わたる」「ぶらさがる」「のぼる」「おりる」「とびおりる」といった、上下の動きの要素を取り入れるための工夫について紹介する。

### ○ 上下の動きの要素を取り入れるための工夫

遊びの中で、幼児が自ら体を動かしたくなる遊びを工夫し、その遊びの中で自然に動きを経験していけるようにすることが大切である。その際、ルールや場を工夫することで上下の動きを経験させることができる。

例えば、探検ごっこなどの遊びをしている幼児に、巧技台やはしごなどを使うことを投げかけ、経験させたい動きに応じて構成を工夫する。「ここは急な山道だよ、のぼれるかな。」「上がったその先は大きながけだよ。飛び降りられるかな。」等、幼児にイメージをもたせ、経験の少ない動きを楽しめるようにすることで、幼児のやってみようという思いが実現できるようにする。



また、固定遊具等も、できるようになったら印を付けるようなチャレンジカードを作り、子供たちが遊びの中で「ここまですることができるになりたい。」「明日もまたやりたい。」と目的をもって取り組めるように工夫していく。

このように、教師が幼児の経験の少ない動きを把握し、それに合わせてルールを工夫したり、遊具や用具を組み合わせたりすることで、その動きを経験させていく必要がある。

## 3 今後の課題

第1回調査と比較すると、運動能力は依然として低位で推移してはいるものの、減少傾向に一部変化が見られた種目もある。近年の運動能力向上に向けた取組の成果が現れている可能性が考えられ、この変化が継続的なものであるかを今後も検証していく必要がある。

また、本調査研究においては、動きの要素を30種類に分類し、幼児が楽しんで体を動かしている遊びの傾向を捉えて分析した。その結果や調査報告内容の成果について、広く普及させていく必要があると考える。

○ 種目別調査結果の推移

① 25m走・平均値等推移

年度	年齢		年齢区分 A			年齢区分 B			全 体		
	項目	性別	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数
昭和55年度	男児		6.3	0.5	7.9	6.1	0.6	9.8	6.2	0.6	9.7
	女児		6.5	0.6	9.2	6.3	0.5	7.9	6.4	0.6	9.4
昭和58年度	男児		6.3	0.6	9.5	6.1	0.5	8.2	6.2	0.6	9.7
	女児		6.5	0.5	9.2	6.3	0.5	7.9	6.4	0.6	9.4
昭和61年度	男児		6.3	0.5	7.9	6.1	0.5	8.2	6.2	0.5	8.1
	女児		6.5	0.6	9.2	6.3	0.5	7.9	6.4	0.6	9.4
平成元年度	男児		6.4	0.8	12.2	6.1	0.6	9.0	6.2	0.7	11.3
	女児		6.5	0.6	9.6	6.3	0.6	9.3	6.4	0.6	9.4
平成4年度	男児		6.3	0.6	9.1	6.1	0.5	8.8	6.2	0.6	9.7
	女児		6.5	0.5	8.4	6.3	0.5	8.0	6.4	0.5	7.8
平成7年度	男児		6.3	0.5	7.9	6.2	0.5	8.1	6.2	0.6	9.7
	女児		6.5	0.6	9.2	6.3	0.5	7.9	6.4	0.5	7.8
平成10年度	男児		6.5	0.7	10.8	6.3	0.7	11.1	6.4	0.7	10.9
	女児		6.6	0.7	10.6	6.5	0.6	9.2	6.5	0.6	9.2
平成13年度	男児		6.5	0.7	10.7	6.2	0.6	9.5	6.4	0.7	10.3
	女児		6.6	0.6	8.9	6.5	1.0	14.7	6.5	0.8	12.7
平成16年度	男児		6.5	0.8	12.5	6.2	0.7	10.6	6.3	0.7	11.7
	女児		6.6	1.0	14.7	6.3	0.6	9.1	6.4	0.8	12.0
平成19年度	男児		6.5	1.0	15.6	6.2	0.6	10.4	6.3	0.8	13.2
	女児		6.5	0.6	8.6	6.4	0.6	9.9	6.4	0.6	9.4
平成22年度	男児		6.5	1.9	29.8	6.2	0.8	12.9	6.3	1.4	21.6
	女児		6.6	0.6	9.3	6.4	0.6	9.4	6.5	0.6	9.4

② 立ち幅跳び・平均値等推移

年度	年齢		年齢区分 A			年齢区分 B			全 体		
	項目	性別	平均 (cm)	標準 偏差	変動 係数	平均 (cm)	標準 偏差	変動 係数	平均 (cm)	標準 偏差	変動 係数
昭和55年度	男児		108.1	16.5	15.3	114.8	17.5	15.2	112.2	17.4	15.5
	女児		97.9	15.8	16.1	105.0	15.7	15.0	102.2	16.1	15.8
昭和58年度	男児		109.8	17.4	15.8	117.3	16.8	14.3	113.7	17.5	15.4
	女児		101.1	15.3	15.1	107.5	16.1	15.0	104.4	16.0	15.3
昭和61年度	男児		109.4	16.6	15.2	116.4	17.3	14.9	113.5	17.4	15.3
	女児		101.1	15.9	15.7	107.3	16.7	15.6	104.9	16.7	15.9
平成元年度	男児		110.3	16.1	14.6	117.7	17.2	14.6	114.5	17.4	15.2
	女児		100.0	16.7	16.7	106.2	16.2	15.3	103.8	16.8	16.2
平成4年度	男児		108.4	17.2	15.9	116.5	17.5	15.1	113.2	17.7	15.6
	女児		98.7	15.7	15.9	104.8	16.7	16.1	102.3	16.5	16.1
平成7年度	男児		105.9	17.7	16.7	111.8	18.2	16.3	109.8	18.3	16.7
	女児		96.1	17.7	18.4	101.3	16.9	16.7	99.6	17.2	17.3
平成10年度	男児		105.4	18.9	17.9	113.0	18.9	16.7	110.0	19.8	18.0
	女児		93.9	17.2	18.3	98.7	18.7	18.9	97.1	18.3	18.8
平成13年度	男児		103.2	18.3	17.7	110.6	19.2	17.3	107.5	19.1	17.8
	女児		94.0	17.2	18.3	99.0	17.1	17.3	96.9	17.3	17.9
平成16年度	男児		104.0	18.8	18.0	112.4	18.7	16.7	109.0	19.2	17.6
	女児		95.3	15.7	16.5	102.2	15.2	14.9	99.4	15.8	15.9
平成19年度	男児		103.1	19.4	18.8	110.5	19.8	17.9	107.5	20.0	18.6
	女児		97.3	17.0	17.4	100.6	17.7	17.6	99.3	17.5	17.6
平成22年度	男児		101.5	16.9	16.6	109.2	18.9	17.3	106.3	18.6	17.5
	女児		93.9	17.0	18.1	100.1	16.7	16.7	97.6	17.1	17.5

③ ソフトボール投げ・平均値等推移

年度	年齢		年齢区分 A			年齢区分 B			全 体		
	項目	性別	平 均	標 準	変 動	平 均	標 準	変 動	平 均	標 準	変 動
			( m )	偏 差	係 数	( m )	偏 差	係 数	( m )	偏 差	係 数
昭和55年度	男 児		7.0	2.5	35.7	8.5	3.1	36.5	7.8	2.9	37.2
	女 児		4.4	1.4	31.8	5.1	1.6	31.4	4.8	1.6	33.3
昭和58年度	男 児		7.0	2.7	38.6	8.3	3.1	37.3	7.7	3.0	39.0
	女 児		4.4	1.5	34.1	5.1	1.7	33.3	4.8	1.6	33.3
昭和61年度	男 児		6.8	2.4	35.3	8.1	2.8	34.9	7.5	2.7	36.0
	女 児		4.5	1.5	33.9	5.2	1.6	31.2	4.9	1.6	32.7
平成元年度	男 児		6.5	2.4	36.2	7.8	2.8	35.6	7.3	2.7	37.0
	女 児		4.2	1.5	35.0	4.8	1.6	33.0	4.6	1.6	34.8
平成4年度	男 児		6.3	2.4	38.9	7.7	2.9	37.3	7.1	2.8	39.4
	女 児		4.1	1.4	34.2	4.9	1.7	34.3	4.6	1.6	34.8
平成7年度	男 児		5.9	2.2	37.3	6.7	2.6	38.8	6.5	2.5	38.5
	女 児		4.2	1.3	31.0	4.6	1.5	32.6	4.5	1.5	33.3
平成10年度	男 児		6.1	2.2	36.1	6.9	2.8	40.6	6.6	2.6	39.4
	女 児		4.0	1.4	35.0	4.5	1.6	35.6	4.3	1.6	37.2
平成13年度	男 児		5.7	2.4	41.8	6.8	2.8	40.7	6.3	2.7	42.3
	女 児		4.0	1.4	33.7	4.7	1.5	33.0	4.4	1.5	34.2
平成16年度	男 児		5.7	2.3	39.6	6.8	2.9	42.6	6.4	2.7	42.5
	女 児		4.0	1.5	36.7	4.5	1.4	31.8	4.3	1.5	34.2
平成19年度	男 児		5.7	2.6	45.9	6.7	2.7	40.8	6.3	2.7	43.0
	女 児		3.9	1.4	36.4	4.6	1.7	37.6	4.3	1.7	38.4
平成22年度	男 児		5.4	2.4	43.7	6.6	2.7	41.8	6.1	2.7	43.6
	女 児		3.9	1.4	36.8	4.5	1.6	34.7	4.3	1.5	36.0

④ 体支持持続時間・平均値等推移

年度	年齢		年齢区分 A			年齢区分 B			全 体		
	項目	性別	平 均	標 準	変 動	平 均	標 準	変 動	平 均	標 準	変 動
			( 秒 )	偏 差	係 数	( 秒 )	偏 差	係 数	( 秒 )	偏 差	係 数
昭和55年度	男 児		72.2	48.6	67.3	86.5	62.6	72.4	80.9	58.0	71.7
	女 児		70.0	44.6	63.7	85.9	55.1	64.1	79.7	51.8	65.0
昭和58年度	男 児		69.3	50.1	72.3	77.8	50.3	64.7	73.6	50.4	68.5
	女 児		66.8	45.5	68.1	78.0	52.5	67.3	72.6	49.6	68.3
昭和61年度	男 児		61.7	40.6	65.8	68.9	43.2	62.7	65.9	42.6	64.6
	女 児		62.6	39.7	63.5	70.4	43.9	62.3	67.4	42.5	63.1
平成元年度	男 児		54.1	36.5	67.5	62.6	45.0	71.8	59.4	41.7	70.2
	女 児		54.1	36.3	67.1	59.9	38.0	63.4	58.1	37.8	65.1
平成4年度	男 児		50.0	34.6	69.1	63.4	47.6	75.1	57.4	41.9	73.0
	女 児		47.6	33.5	70.5	62.5	60.8	97.4	56.8	50.5	88.9
平成7年度	男 児		50.8	31.0	61.0	57.3	37.9	66.4	56.1	36.3	64.7
	女 児		50.9	36.0	70.7	58.7	37.8	64.3	55.7	37.3	67.0
平成10年度	男 児		41.7	26.5	63.5	51.4	34.1	66.3	48.7	34.3	70.4
	女 児		43.7	29.2	66.8	51.2	38.9	76.0	49.0	35.3	72.0
平成13年度	男 児		47.2	42.5	90.1	55.0	39.5	71.7	51.8	40.9	79.0
	女 児		42.6	27.7	65.0	51.7	36.9	71.3	47.9	33.7	70.3
平成16年度	男 児		45.0	34.2	76.1	51.1	34.8	68.0	48.6	34.7	71.3
	女 児		44.9	34.4	76.6	52.4	36.6	69.8	49.4	35.9	72.6
平成19年度	男 児		40.3	31.7	78.7	50.9	36.4	71.4	46.6	34.9	74.9
	女 児		45.2	33.8	74.6	50.1	40.4	80.7	48.1	37.9	78.8
平成22年度	男 児		40.8	26.6	65.3	52.7	37.3	70.7	48.1	34.1	70.9
	女 児		42.0	30.2	71.9	52.5	37.9	72.3	48.2	35.3	73.3

## ⑤ 両足連続跳び越し・平均値等推移

年度	年齢		年齢区分 A			年齢区分 B			全 体		
	項目	性別	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数	平均 (秒)	標準 偏差	変動 係数
昭和 55 年度	男 児		5.6	1.3	23.2	5.3	1.1	20.8	5.5	1.2	21.8
	女 児		5.4	1.1	20.4	5.2	0.9	17.3	5.3	1.0	18.9
昭和 58 年度	男 児		5.5	1.4	25.5	5.2	1.0	19.2	5.4	1.2	22.2
	女 児		5.4	1.3	24.1	5.1	0.7	13.7	5.2	1.1	21.5
昭和 61 年度	男 児		5.6	1.5	26.9	5.3	1.3	24.9	5.4	1.4	25.9
	女 児		5.6	1.5	26.3	5.3	1.2	22.7	5.4	1.3	24.1
平成 元 年度	男 児		5.6	1.3	23.8	5.2	1.1	20.1	5.4	1.2	22.2
	女 児		5.5	1.1	20.2	5.3	0.9	17.7	5.4	1.0	18.5
平成 4 年度	男 児		5.8	1.7	29.0	5.4	1.4	26.1	5.6	1.5	26.8
	女 児		5.7	1.4	24.4	5.4	1.2	22.7	5.5	1.3	23.6
平成 7 年度	男 児		5.5	1.5	27.3	5.2	1.3	25.0	5.4	1.4	25.9
	女 児		5.5	1.2	21.8	5.3	1.0	18.9	5.4	1.1	20.4
平成 10 年度	男 児		5.7	1.7	29.8	5.3	1.3	24.5	5.4	1.5	27.8
	女 児		5.7	1.6	28.1	5.5	1.3	23.6	5.5	1.4	25.5
平成 13 年度	男 児		5.7	1.9	33.8	5.2	1.1	21.8	5.4	1.5	28.3
	女 児		5.7	1.6	28.8	5.5	1.7	30.4	5.6	1.7	29.6
平成 16 年度	男 児		5.7	1.9	32.4	5.6	2.9	52.0	5.7	2.5	44.6
	女 児		5.7	1.3	23.1	5.4	1.0	18.6	5.5	1.1	20.8
平成 19 年度	男 児		5.8	1.6	27.6	5.4	1.3	24.5	5.6	1.5	26.1
	女 児		5.6	1.2	21.0	5.4	1.2	22.0	5.5	1.2	21.6
平成 22 年度	男 児		5.5	1.7	30.3	5.3	1.2	23.0	5.4	1.4	26.3
	女 児		5.6	1.3	22.5	5.3	1.3	24.8	5.4	1.3	24.1

## ○ 参考資料

### 運動能力測定の方法について

#### 1 25m 走

- ① コース幅 80cm 前後の 30m の直線路を作る。
- ② スタートラインに立たせ、両足を前後に開き、「よいい」の姿勢をとらせる。
- ③ 30m 地点のゴールまで疾走させ、スタートから、25m 地点を通過するまでの時間（園児の胸が通過した時点）を測る。
- ④ 1/100 秒を切り捨て、1/10 秒の単位で測定する。
- ⑤ 測定は 1 回だけ行う。

#### 2 立ち幅跳び

- ① 床に幅 2 cm の踏み切り線を引き、直角に測定用のメジャーを置く。
- ② 幼児はくつ下などを脱ぎ、はだしになる。
- ③ 踏み切り線を踏まないように、両足をわずかに離して立ち、両足同時踏み切りで跳ぶ。
- ④ 二重踏み切りや片足踏み切りはやり直しをさせる。
- ⑤ 踏み切り線から着地点までの最短距離を cm 単位で測定する。（cm 未満は切り捨てる。）
- ⑥ 2 回測定し、よい方を記録する。

#### 3 ソフトボール投げ

- ① 幅 6 m の測定用の線を 1 m 間隔で引く。
- ② 両足を前後に開き、投球ラインを踏まないように立つ。（投げる手と反対の足を前にする。）
- ③ 投球ラインを超えないように、助走せずオーバースローで投げる。
- ④ 投げるときに足が上がってもよいが、投球ラインを超えないようにする。
- ⑤ 記録はメートル単位で測定する。（メートル未満は切り捨てる。）
- ⑥ 2 回続けて投球し、良い方を記録する。

#### 4 体支持持続時間

- ① 幼児の肘の高さ程度の巧技台 2 台を肩幅位の間隔に置き、間の床に踏み台を置く。
- ② 巧技台の間に立ち、「よいい」の合図で、両手を巧技台の端に置く。
- ③ 「はじめ」の合図で、両腕を伸ばし、足を床から離す。足が離れたら踏み台を外す。
- ④ 両腕で体重を支えられなくなるまで続ける。
- ⑤ 記録は秒単位で測定する。（秒未満は切り捨てる。）
- ⑥ 測定は 1 回だけ行う。

#### 5 両足連続跳び越し

- ① 4 m 50cm の距離に 50cm 間隔で 10 個の積み木（縦 5cm 横 10cm 高さ 5cm）を並べる。
- ② 最初の積み木の前に立ち、「はじめ」の合図で 10 個の積み木を連続して跳び越す。
- ③ 両足を揃えて跳ばないとき、積み木を 2 個以上一度に跳び越したとき、積み木を散乱させた場合などは、やり直す。
- ④ 1/100 秒を切り捨て、1/10 秒単位で測定する。
- ⑤ 2 回続けて測定し、良い方を記録する。

補助調査アンケート

園名 \_\_\_\_\_ 立 \_\_\_\_\_ 園 \_\_\_\_\_ 園長名 \_\_\_\_\_

このアンケートは、5歳児の運動能力調査実施と同時に、以下の目的で各園より御提出いただくものです。お手数をおかけしますが、よろしくお願ひします。

- ※ 5歳児が楽しんで体を動かしている遊びについて、各園での工夫や、遊びでみられる「動き」について調べ、分析する。
- ※ 分析結果から、運動能力の向上を図るために効果的な運動遊びや、さまざまな工夫について提言する。

※ 「動き」について

本調査における動きは、幼児の自由遊びを観察・調査した結果から、財団法人体育科学センターが提案した基本的動作及び、「平成17年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 I 幼少期に身につけておくべき基本運動（基幹運動）」に関する研究、NHK「からだであそぼ」において使用された基本動作のそれぞれを参考に作成した。

◎貴園の5歳児について、以下の質問にご回答ください。

1 領域「健康」にかかわる貴園の指導の重点点について御記入ください。

2 領域「健康」に関わる貴園の課題について2つ以内で○をつけてください。

- ( ) 遊ぶ場所が狭く、施設や設備が不足している。
- ( ) 園児の動きが以前と比べてぎこちなく感じる。また、転びやすくなっている。
- ( ) 園児が体を動かすことや運動の好き嫌いなど、個人差が大きくなっている。
- ( ) 基本的生活習慣や生活リズムなどが定着していない園児が増えた。
- ( ) 偏食など、食生活に問題のある園児が増えた。
- ( ) 新しい遊びに取り組もうとしなかったり、すぐにあきらめてしまったりする園児が増えた。
- ( ) その他

6 補助調査アンケート

3 園児が楽しんで体を動かしている遊びを、3つ以内で御記入ください。また、その遊びで見られる動きを下表から選び、番号を御記入下さい。

遊びの名前	その遊びの概要、特徴的なルール等	含まれている動き (複数回答可)

(動き)

- 1. たつ・しゃがむ
- 2. おきる・ねる
- 3. まわる
- 4. ころがる
- 5. くむ・つみかさなる
- 6. わたる
- 7. ぶらさがる
- 8. のぼる
- 9. おりる
- 10. とびおりる
- 11. はう
- 12. あるく
- 13. はしる
- 14. とぶ・はねる
- 15. かむす
- 16. くぐる
- 17. もつ・はこぶ
- 18. おす
- 19. ひく
- 20. つかむ
- 21. 上げる
- 22. うける・うけとめる
- 23. わたす
- 24. ふる
- 25. まわす
- 26. つむ・つみあげる
- 27. ころがす
- 28. ほる・けずる
- 29. うつ・たく
- 30. ける

4 貴園で、園児が体を動かすことを楽しむために工夫をしている遊びがありましたら、2つ以内でその内容を御記入ください。

遊び	場の工夫	ルールの工夫	遊具・用具の工夫	その他

8 今回の調査において運動能力調査 5 種目のすべての結果が、平均より上位に位置する園児 2 名の傾向について御記入下さい。

- ※ 御記入いただく対象の園児は、運動能力調査を実施していただき、記録を電子データで入力していただく、候補となる園児が表示されますので、その中から抽出してください。
- ※ 対象となる園児がない場合は、記入の必要はありません。
- ※ 園児の性別は同じでもかまいませんが、原則として、性別の異なる園児 1 名ずつを抽出してください。
- ※ それぞれの項目は、担任が把握している範囲で御記入ください。不明の点は空欄でかまいません。

項目	傾向
対象園児の年齢	( ) 歳 ( ) 月 ( ) 歳 ( ) 月
対象園児の性別	
園児が楽しんで体を動かしている遊び	
上記の遊びで見られる動き (複数回答可)	

(動き)

1. たつ・しゃがむ
2. おきる・ねる
3. まわる
4. ころがる
5. くむ・つかさなる
6. わたる
7. ぶらさがる
8. のぼる
9. おりる
10. とびおりる
11. はう
12. あるく
13. はしる
14. とぶ・はねる
15. かむ
16. くぐる
17. もつ・ほこぶ
18. おす
19. ひく
20. つかむ
21. なげる
22. うける・うけとめる
23. わたす
24. ふる
25. まわす
26. つむ・つみあげる
27. ころがす
28. ほる・ける
29. うつ・たく
30. ける

9 その他 園児の体力・健康づくりや本調査についての御意見があれば御記入ください。

5 「園児の日常生活に必要な動作や身のこなしなど」について、下記のように感じられる事例がありましたら 2 つ以内で○をつけてください。(5 歳児の全体的な印象でお答えください。)

- ( ) 転びやすい ( ) 階段の昇降がぎこちない
- ( ) 立ったまま靴などがはけない ( ) 物や人にぶつかかりやすい
- ( ) はさみ等の道具がうまく使えない ( ) 同じ姿勢が保てない
- ( ) 歩くとすぐ疲れてしまう ( ) 敏速に動けない
- ( ) ボールがうまく投げられない ( )
- ( ) その他 ( )

6 園児の健康・体力づくりなどについて小学校と連携して取り組み、成果をあげている事例があれば、御記入ください。

取組事例 (指導・援助の工夫等を含む)	成 果

7 園児の食習慣の見直しに関する取り組みで成果をあげている事例があれば、2 つ以内で御記入ください。

取組事例 (指導・援助の工夫等を含む)	成 果

御協力ありがとうございました。



《平成22年度「第11回 東京都公立幼稚園5歳児の運動能力に関する調査研究」調査実施園》

千代田区立麴町幼稚園	千代田区立九段幼稚園	千代田区立番町幼稚園
千代田区立お茶の水幼稚園	千代田区立千代田幼稚園	千代田区立昌平幼稚園
千代田区立いずみこども園	千代田区立ふじみこども園	中央区立月島第一幼稚園
中央区立豊海幼稚園	港区立芝浦幼稚園	港区立中之町幼稚園
新宿区立市谷幼稚園	新宿区立早稲田幼稚園	新宿区立東戸山幼稚園
新宿区立西戸山幼稚園	文京区立明化幼稚園	文京区立後楽幼稚園
台東区立竹町幼稚園	台東区立田原幼稚園	台東区立育英幼稚園
墨田区立緑幼稚園	墨田区立八広幼稚園	江東区立第五砂町幼稚園
江東区立東砂幼稚園	江東区立南陽幼稚園	江東区立ひばり幼稚園
江東区立もみじ幼稚園	品川区立城南幼稚園	品川区立第一日野すこやか園
品川区立八潮わかば幼稚園	目黒区立ふどう幼稚園	目黒区立ひがしやま幼稚園
世田谷区立塚戸幼稚園	渋谷区立広尾幼稚園	渋谷区立千駄谷幼稚園
渋谷区立山谷幼稚園	杉並区立高円寺北幼稚園	杉並区立成田西幼稚園
豊島区立西巢鴨幼稚園	豊島区立南長崎幼稚園	豊島区立池袋幼稚園
北区立うめのき幼稚園	北区立さくらだ幼稚園	北区立ほりふな幼稚園
荒川区立南千住第二幼稚園	荒川区立町屋幼稚園	板橋区立高島幼稚園
板橋区立新河岸幼稚園	練馬区立北大泉幼稚園	練馬区立光が丘わかば幼稚園
練馬区立光が丘さくら幼稚園	足立区立鹿浜幼稚園	足立区立おおやた幼保園
葛飾区立飯塚幼稚園	葛飾区立水元幼稚園	江戸川区立小松川幼稚園
江戸川区立船堀幼稚園	江戸川区立鹿本幼稚園	府中市立矢崎幼稚園
府中市立小柳幼稚園	日野市立第三幼稚園	日野市立第四幼稚園



## 研究に携わった所員・教員研究生・協議委員・調査委員等

所 長 岩佐 哲男

研修部長 坂本 和良

教育開発課長 樋口 豊隆 主任指導主事 針谷 玲子

### ○自尊感情や自己肯定感に関する研究

所 員	統括指導主事	角 康宏、青木 由美子
	指導主事	執行 純子、濱辺 理佐子、片桐 あかね、山本 浩司、 佐々木 由美子、島崎 智恵、長谷川 祥子、井原 優
教員研究生	品川区立清水台小学校 主幹教諭 山本 充子 渋谷区立中幡小学校 主任教諭 國 美奈子 あきる野市立前田小学校 教諭 鈴木 竜也 目黒区立目黒中央中学校 主任教諭 濱島 美佐子 大田区立雪谷中学校 主任教諭 加藤 雄一 御蔵島村立御蔵島中学校 教諭 芳賀 貴明	
研究協力大学	慶應義塾大学 教授 伊藤 美奈子 他	
研究協力校	文京区立第一幼稚園、荒川区立峡田小学校、立川市立立川第三中学校、 都立荻窪高等学校	

### ○言語活動の充実に関する研究

所 員	統括指導主事	荒川 元邦、青木 由美子
	指導主事	村上 卓郎、江口 千穂、高瀬 智子、浅野 あい子、 吉川 正、鈴木 孝子
	教授	田中 久美子
教員研究生	文京区立明化小学校 主任教諭 桐敷 芳子 台東区立千束小学校 主任教諭 濱田 哲 江戸川区立臨海小学校 主任教諭 関口 千恵 練馬区立石神井小学校 教諭 高瀬 隆太郎 足立区立古千谷小学校 教諭 赤星 光江 足立区立東栗原小学校 教諭 土生津 静	
協議委員	千葉大学 教授 天笠 茂	

○東京都公立幼稚園5歳児の運動能力に関する調査研究

所 員	統括指導主事	鳥屋尾 史郎
	指導主事	丸茂 聡、大須賀 慎一、小山 多香子、山根 まどか 島崎 智恵
調査委員	千代田区立ふじみこども園	副園長 大関 邦子
	江東区立豊洲幼稚園	副園長 仙田 晃
	中央区立豊海幼稚園	教諭 佐藤 恵
	文京区立千駄木幼稚園	教諭 吉羽 優子
	練馬区立光が丘わかば幼稚園	教諭 金子 洋子
協議委員	東京学芸大学 准教授 吉田 伊津美	

---

東京都教職員研修センター紀要 第10号

印刷物登録22年度 第19号

平成23年3月 発行

編集・発行 東京都教職員研修センター

所在地 〒113-0033 東京都文京区本郷1-3-3

電話 03(5802)0319

印刷 株式会社 ワーナー

所在地 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-2

金子ビル1F

電話 03(5214)6421

---

